

〈共同討議Ⅱ 概要報告〉

濱田賞の15年——カント美学の先へ——

田中 綾乃

若手研究者育成を目的とした濱田賞は、2006年から始まり2020年に15回目を迎えた。また、2021年は賞がその名を冠する故濱田義文元会長の生誕100年でもある。その節目にあたり、今回の共同討議では、かつて濱田賞を受賞し、受賞以降、進境著しい会員にその後の研究の展開について発表を行ってもらおうという趣旨で企画された。

山蔦真之氏は2015年(第10回目)に「メンデルスゾーン美学における「混合感情」の射程」で、高木駿氏は2019年(第14回目)に「趣味判断における不快の感情の生成—カント美学と醜さ」で受賞した。二人ともカント美学を中心にしながら、近年はカント以降の発展的研究に従事していることもあり、「カント美学の先へ」というテーマとなった。

山蔦氏は、カントが「美的理念」や「超感性的なもの」の概念の内実を十分に論じなかったことによって、その後の観念論者や初期ロマン主義者、ポストモダニストたちに至るまでカント美学がいわば誤読されてきたと捉える。つまり、哲学の最高地点として美を特別視する流れの中で、山蔦氏はヘーゲルのカント批判に着目する。ヘーゲルも初期では「反省的判断力」を「知的直観」として解釈するが、後年では美や芸術が絶対的理念を開示することを認ながらも、美学を哲学よりも低次のものとして位置づける。このことはカント自身も美と芸術への過度な期待が哲学の営みの放棄になることを十分に認識していたという点で、ヘーゲルのこの批判がカント美学を補完しつつ、その「先」を行くものであると論じられた。

高木氏は、カント美学には「隠された美の家父長制」があることを指摘し、それを明らかにしようとする。カントが欲望や関心を否定する純粋な美の理論を示したという点は、バークの「欲望による美の家父長制」を解体し、一見、ジェンダー中立的な美の領域を確保しているように見える。だが、高木氏はまさにカントの美が可能になる構造にこそ男性優位な性の非対称性が反映されていると論じる。カントの崇高概念の中に自然に対する理性の優位や暴力性を読み取る従来のジェンダー批判に加え、高木氏が着目するのは構想力の「創造」概念である。この構想力の「創造」が美的理念を生み出し、理性の働きを促すという点において、理性が自然を凌駕、加工するという「自然と女性：理性と男性」というジェンダー的反映を見てとるのだ。さらに純粋な美が成立する構造においても、美的理念および構想力の創造が関与していることから、純粋な美がジェンダー中立的な概念ではなく、男性優位な概念であることを論証した。

二人の討議では、高木氏から山蔦氏に対して、カント的な路線を継承したヘーゲル解釈が果たして美学の「先」と言えるのかという点で議論がなされた。また参加者からは、高木氏に対して、ジェンダー批判を「理性 v.s. 自然」=「男性 v.s. 女性」と単純化、図式化することそのものへの危険性に省み質疑が活発になされた。全体を通して、ジェンダーの視点も踏まえながらカント美学をクリティカルに捉えようという試みは清新で、意欲的な共同討議であった。